



黒田記念室のリニューアルオープン

今年1月より、改修工事をすすめていた黒田記念室が、このほどその工事を完了しました。改修にあたっては、昭和3年竣工のこの建物が昭和初期の美術館建築（岡田信一郎設計）として貴重なものであることから、創建当初のすがたに復することが計画されました。二階部分は、空調設備を新設し、外光を取り入れていた当時を偲ばせるように光天井を復元しました。また、これまで、黒田記念室のみで、黒田清輝の作品を展示していましたが、会議室と収蔵庫として使用されていた旧陳列室も、ギャラリーに改修しました。現在、記念室では、油彩画126点、素描170点、そのほか写生帖、書簡などを所蔵していますが、これにより、展示作品数は、これまでのほぼ倍の50点となり、より充実した環境のなかで作品をご覧いただけるようになりました。

これにくわえて、旧美術研究所の所長室も、公開のスペースとして復元し、創設当初の様子を写した写真や資料を展示するとともに、黒田記念館のホームページもご覧いただけるようにコンピューターを設置し、最新の研究情報も提供できるようにいたしました。

また、二階廊下の壁面には、黒田清輝作品の光学的

な調査研究の成果の一部として、本年度調査した「智・感・情」の赤外線写真などをパネル展示し、研究成果も紹介できるようにしました。さらに、フランス留学中に滞在し、画家としての成長をはぐくんだグレー・シュル・ロワン村についても、写真パネルによって紹介しています。これもまた、現在もなお、当時の風景が残されているこの小村を、現地調査した成果の一部だといえます。こうしたパネル等は、廊下部分に残されていた、当時のピクチャーレールを活用し、創建当初の展示方法をも復元を試みたものです。

工事完了後の一般公開に先立ち、9月14日には、特別招待日として、黒田家のご遺族の方々、および関係各機関の方々、報道関係者約50名をお招きしてご覧いただきました。9月20日からは、毎週木曜日（午後1時から4時まで）に一般に公開するようになりました。来館者のみなさんからは、落ち着いた雰囲気の中で、ゆっくりと、「湖畔」をはじめとする黒田清輝の代表的な作品を鑑賞できるようになったという声が数多く寄せられています。

（美術部・田中 淳）

※最終ページに黒田記念館公開日のカレンダーを掲載しています。



「湖畔」、「智・感・情」の前で説明をうける招待者

タイ国芸術総局長の来訪と日・タイ共同研究（第2期）の覚書の締結

1998年7月に日・タイ共同研究「タイ国遺跡の保存と修復」（第1期）の覚書を締結し、共同で調査、研究を行って多くの成果を得ました。三年が経過して覚書の有効期限を迎えたため、第2期の覚書が締結されることになりました。そのために、タイ国政府教育省芸術総局長のアルヴス・ノエンチュクリン氏が、文化庁の招へいにより来日し、7月24日に所長室において、渡邊明義・独立行政法人東京文化財研究所所長と覚書への調印を行いました。総局長の来日に合わせて東文研が招へいた、芸術総局秘書室長ソムスタ氏、同考古博物館局遺跡保存部長タナチャイ氏、同保存科学部長チラポン氏とともに共同研究についての協議を行った後、文化庁を訪れ、文化庁長官を表敬訪問して、今後の日・タイ文化交流についての協議を行いました。アルヴス総局長一行は、その後、関西を訪れ、奈良文化財研究所や奈良県立橿原考古学研究所等における視察と協議を行い、また多くの社寺や博物館を視察しました。

この度締結された覚書に則り、最長2004年7月まで、スコータイ遺跡、アユタヤ遺跡を中心とした「タイ国屋外遺跡の保存修復に関する調査研究」（第2期）が行われます。

（国際文化財保存修復協力センター・西浦忠輝）



文化庁長官を表敬訪問し協議を行うタイ国教育省芸術総局長

韓国国立中央博物館との研究交流に関する合意書締結

文化財の保存と修復に関する韓国との研究交流には長い歴史がありますが、2001年8月17日、独立行政法人東京文化財研究所渡邊明義所長と韓国国立中央博物館池健吉館長の間で「独立行政法人文化財研究所と韓国国立中央博物館における研究協力および交流に関

する覚書」が取り交わされました。現在、韓国では新しい国立中央博物館の建築中であり、その開館を控えているため具体的な交流対象としてさまざまなテーマが考えられますが、最初のテーマとして中央博物館で所蔵している中央アジアから将来された壁画の保存修復に関する研究交流がテーマになります。この壁画は、大谷探検隊が将来した壁画の一部です。敦煌莫高窟壁画などと同じように土壁の上に彩色されています。彩色層の剥離などが見られ早急の修復処理を考えなくてはなりません。この修復について壁画修復のノウハウを提供し、壁画の顔料分析などを含めて総合的に研究することによって我々が持っている敦煌壁画などの研究に有益な情報が得られます。今後、新設博物館環境の調整などの研究交流も行われるようになれば、この署名によって韓国との保存修復研究交流が今まで以上に活発になることが期待できます。

（修復技術部・青木繁夫）



韓国国立中央博物館との研究交流覚書の調印

中国文物研究所との覚え書き締結

平成13年2月、中華人民共和国の中国文物研究所から、東京国立文化財研究所（当時）に対して、両研究所が将来にわたり共同して文化財保存のための研究交流を進めていくための覚え書きを締結したいとの申し入れがありました。この問題は両者で基本的な合意に達し、4月以来内容と文言の調整をはかってきましたが、独立行政法人への移行にともない、枠組みを東京、奈良の両文化財研究所を包括したものへと発展させることになり、今回「日本国独立行政法人文化財研究所と中華人民共和国中国文物研究所による文化財保護のための共同研究および交流に関する趣意書」として締結の運びとなり、独立行政法人文化財研究所渡邊明義理事長が北京へ出張し、9月26日中国文物研究所長室において、無事調印、交換を完了しました。

中国文物研究所は、国家文化局に直属し、古建築・古跡保護研究センター、文物保護科学技術研究センター、文献・文物考古研究センター、文物資料情報センター、文物

科学育成センター等をそなえた中国における文化財保存の専門機関です。この覚え書きの締結によって、東京、奈良の両文化財研究所は、中国文物研究所研究員とのこれまで以上に緊密なパートナーシップを構築するとともに、多方面にわたる研究交流を展開することが可能になりました。



覚え書きに調印、交換し、握手する渡邊明義理事長（東京文化財研究所長）（左）と呉加安中国文物研究所長（右）

なお、この覚え書きにのっとり、東京文化財研究所では研究交流の最初の試みとして、中国文物研究所と北京智化寺壁画の保存に関する共同研究を開始しました。

（国際文化財保存修復協力センター・岡田 健）

芸術研究振興財団との協力

在外日本古美術品修復協力事業は元来、平山郁夫東京芸術大学長（当時）、現芸術研究振興財団理事長が提唱し、文化庁がこれに賛同して、平成4年度から開始された事業です。当研究所はその実施機関という位置づけですが、芸術研究振興財団は当初より今日まで、事業の実施者の一人として当研究所と密接な協力関係を保ってまいりました。しかし、行政改革の一環として、当研究所が奈良国立文化財研究所と統合し、独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所となるに際し、事業予算は当研究所の予算として交付されることになり、事業を支えてきた二つの文化庁を中心とする委員会を含め、これまでの協力の枠組みが解消しました。委員会の方はその後、当研究所が当該事業を着実に遂行する必要上再組織されましたが、この事業が開始された歴史的経緯に鑑み、当研究所と芸術研究振興財団の間で協力関係も再構築することになり、当研究所長と芸術研究振興財団平山理事長が、平成13年4月1日付で事業の協力に関する覚書に署名いたしました。この協力関係の樹立は今後の事業の推進に大きな意味を持つことは疑いありません。

（所長・渡邊明義）

ミニ・シンポジウム「宋風」

美術部では中期研究計画「日本における外来美術の受容についての研究」の一環として本年度第1回目のミニ・シンポジウム「鎌倉・南北朝時代における外来美術の受容—宋風の問題を中心に—」を開催しました（7月25日（水）於当研究所セミナー室）。一般に「宋風」とは鎌倉時代の日本美術にあらわれた中国・宋代の影響をうけた表現を意味しますが、各研究者で微妙に意味・内容が異なっているようです。今回のシンポジウムはその点に着目して開催されたものです。参加者は全国各地から119人に及び、このテーマについての関心の高さが窺われました。当日は当部広領域研究室長・島尾新による「初期水墨画と宋風」、東京国立博物館情報サービス室長・山本勉氏による「宋風彫刻の基本的問題」、文化庁美術学芸課文化財調査官・林温氏による「絵画における宋風」、当部広領域研究室研究員・津田徹英による「鎌倉地方における宋風」の各基調報告とともに情報調整室長・井手誠之輔の司会で討論が行われました。様々な立場からの報告・討論を通じ、それぞれの用いる「宋風」の内容の振幅は、それぞれが「宋風」をどのような語りの構造・枠組みのなかで捉えているかに起因することが浮かびあがりました。今回のミニ・シンポジウムを通じ、外来の美術の受容を考えて行くうえで、その理解はどのようなスタンスから異文化を理解して行くかということと表裏一体の関係にあることが再認識・共有化できた点において有意義なミニ・シンポジウムとなりました。

（美術部・津田徹英）



基調発表に耳を傾ける大勢の参加者

平成13年度在外日本古美術品調査について

修復技術部と管理部では、文化庁ならび外務省担当者とともに平成13年度の在外日本古美術品（工芸品）の修復のための調査をデンマークおよびドイツで行いました。ヨーロッパにある日本工芸品のコレクションは、江戸時代を通じて輸出した陶磁器や漆芸品の収集をもとにしたも

のと、19 世紀後半に日本を訪れた外国人によって収集されたものがあります。今回、調査したコペンハーゲン国立博物館の所蔵するコレクションは、デンマーク王室が 1670 年代以前に独自のルートで収集した日本の輸出漆器が多数含まれています。「唐獅子蒔絵筆筒」は、キャビネットの各段部に蒔絵と梨地のボーダーを巡らし、その内側に岩や唐獅子などの文様を、漆下地で盛り上げてから金粉を蒔く高蒔絵で表した17世紀中頃の作品です。このほか国立博物館所蔵の王室コレクションには、蒲鉾形の蓋を持つコッファーとよばれる入子式の洋櫃や蒔絵皿などが展示されています。コペンハーゲン市内にあるローゼンブルグ城ではロイヤルコレクションの一部を宮殿内に飾り、17 世紀後半のヨーロッパの宮殿風景を再現しています。宮殿の 1 室に飾られている「山水蒔絵筆筒」は、黒漆に高蒔絵の装飾で元禄時代に作られた輸出漆器の特徴を示しています。

シュツツガルト市にあるリンデン美術館は東洋美術品の宝庫として知られています。とくに、ベルツコレクションを中心とした中国、日本絵画は質、量ともにヨーロッパを代表する所蔵品です。「花鳥楼閣蒔絵螺鈿洋櫃」は、17 世紀の南蛮様式の洋櫃であり、螺鈿のボーダーの中に樹下鳥獣や建物を平蒔絵で表しています。そのほかシュツツガルト郊外のエッチンゲン城にも「雲龍蒔絵鞍」をはじめとする日本の工芸作品が多数展示されています。

今回の調査では2 カ国で合計 15 件の高芸品の調査を行いました。調査した中には17 世紀半ばの製作時期を特定することができる作品が含まれています。今後の調査報告会で検討し来年度以降の修復対象の作品として推薦したいと考えています。

(修復技術部・加藤 寛)



「唐獅子蒔絵筆筒」(コペンハーゲン国立博物館蔵)

日中共同研究

—敦煌莫高窟壁画の保存修復研究—

当研究所は、敦煌莫高窟壁画の保存修復に関して敦煌研究院と共同研究を実施していますが、平成 13 年 7 月 23 日から 7 月 30 日にかけて現地共同研究が行われ、修復技術部青木繁夫、美術部中野照男、情報調整室城野誠治、国際文化財保存修復協力センター岡田健が参加しました。

今回は、「敦煌莫高窟壁画修復履歴管理システム」のデジタル画像撮影と入力、正射投影画像の作成、損傷状態や修復処理内容のデータベース作成などの研修を敦煌研究院文物保護研究所答案室(修復記録管理室)のメンバーに対して実施しました。修復用語などで若干の運用上の問題が認められましたが、本格的に使用する来年度には修正され実際の修復に使用されることになります。また、偏光、赤外線、紫外線蛍光などを利用したデジタル写真とその画像処理情報は、敦煌壁画を研究する上で有効な研究・修復情報を提供してくれることから撮影方法などの確立のための撮影実験を行いました。

(修復技術部・青木繁夫)



「敦煌莫高窟壁画修復履歴管理システムの研修」

エジプト、アブ・シール南丘陵頂部遺跡の保存修復計画策定のための調査

早稲田大学古代エジプト調査隊(隊長:吉村作治教授)により 1991 年から発掘調査が行われているアブ・シール南丘陵頂部遺跡の石造建造物遺構と日乾煉瓦遺構の保存修復計画策定のための現地調査を行いました。

石灰岩からなる石造建造物遺構は、現状保存は困難と判断されます。何らかの補填、補強が必要ですが、その材料、工法を今後具体的に検討していく必要があります。また、日乾煉瓦遺構については、基本的に埋め戻すこととなりますが、一部を露出保存するための強化処置がどこまで可能かを検討する必要があります。

昨年夏に機器を設置し、遺跡地域の温度、湿度および岩体表面温度の自動測定を行ってきました。今回、1 年間の



エジプト、アブ・シール南丘陵
頂部遺跡における環境計測シ
ステムの設置

よって得られるデータは、保存計画策定のための貴重な基礎資料となります。

(国際文化財保存修復協力センター・西浦忠輝)

データを回収し解析したところ、寒暖および乾湿の日較差がきわめて大きく、結露が重要な劣化要因となり得ることが示唆されました。今回はさらに風向計、風速計、日射計、雨量計を付加し、トータル環境計測システムを構築しました。この計測システムに

遺跡の劣化状況の3次元での記録と、その時系列変化を解析して劣化のプロセスの解明に役立てたり、崩落している遺跡の部材を3次元情報として取り込み、遺跡の復原に利用したりすることを想定し、そのために実際の遺跡における応用研究と、これに適応するアルゴリズムとプログラムの開発です。

(国際文化財保存修復協力センター・斎藤英俊)

3 次元デジタル情報の文化遺産保存への 応用研究の開始

昨年1月に当時の文部省と科学技術庁が統合され、文部科学省になりました。文化庁ではこの統合の機会を捉えて、科学技術という切り口から文化財の保存や伝統文化の振興を図る新たなプロジェクトを立ち上げるべく、関係諸機関にアイデアを募り、東京文化財研究所からも幾つかの計画案が提出されました。その結果、3次元レーザー測量装置を使用して文化遺産をデジタル情報化し、また、劣化状況の解析等に利用するプロジェクトが開始されました。

このプロジェクトは科学技術振興事業団が実施している「戦略的基礎研究推進事業」のなかで行われるもので、既に平成12年度から開始されている「文化遺産の高度メディアコンテンツ化のための自動化手法」(研究代表者：池内克史東京大学生産技術研究所教授)の研究チームとして参加する形となります。平成13年



調査風景
滋賀県 MIHO MUSEUM にて

8月1日付けで東京文化財研究所と科学技術振興事業団の間で「共同研究契約書」がとり交わされました。期間は平成17年3月までの4ヶ年間で、今年度分として1,000万円が配分されました。

研究内容としては、石造やレンガ造の建築や

臭化メチル燻蒸代替法に関する研究会 「新規燻蒸剤の効力と性状」の開催

保存科学部では、臭化メチルの2004年末全廃を控え、その代替法の研究と普及に集中的に取り組んでいます。ここ10年ほどの間に世界中で大規模燻蒸に対する問題意識が高まり、燻蒸だけに頼るのではなく、害虫の被害を起こさないように予防する取り組みが積極的に行われています。わが国でも、その努力を積極的に行っていくべきですが、その一方では害虫が広い範囲で発生したときなどには、燻蒸剤がなくては困る場合もあります。そこで、9月18日当研究所会議室で、文化財用の新規燻蒸剤について、その効力と性状をテーマに研究会を開催しました。

当日は、横浜市環境保全局の太田志津子氏による「わが国における化学物質対策の最近の動向について」、文化財虫害研究所の山野勝次氏による「今後の文化財の害虫防除における燻蒸剤の役割」、4メーカーより、フッ化スルフル、酸化プロピレン燻蒸剤、酸化エチレン製剤、ヨウ化メチルの4種類の代替燻蒸剤についてそれぞれ発表が行われました。

会場では、新規燻蒸剤の効力と性状についてさまざまな質問が行われ、また燻蒸剤が自然史資料のDNAに及ぼす影響などについての話題も提供されるなど、終始、積極的な議論が行われました。今後も、このような機会を通して、問題点の把握とともに真に何が必要とされているか考えてゆきたいと思います(参加者約50名)。

(保存科学部・木川りか)

第4回民俗芸能研究協議会の開催

9月11日、当研究所セミナー室で、第4回民俗芸能研究協議会が開催されました。

この研究協議会は、平成10年度から芸能部が実施している事業で、全国各地の民俗芸能のかかえる様々な問題解決を目指し、各県・市町村文化財保護行政担当者、民俗芸能保存会関係者、専門研究者などが一堂に会して、テーマに関して研究協議するものです。今回は70名の参加者を得て、「民俗芸能の記録作成の方法と活用」をテーマに、

以下の事例発表と総合討議を行いました。

・事例発表

「総合的な記録作成—東京都豊島区長崎獅子舞の場合を事例に—」(東京文化財研究所芸能部民俗芸能研究室調査員 小野寺節子)

「映像記録作成—滋賀県の太鼓踊りの場合を事例に—」(滋賀県教育委員会文化財保護課主幹 長谷川嘉和)

「新メディアによる記録作成—田沢湖芸術村の場合を事例に—」(財団法人 民族芸術研究所 荒木一)

(たざわこ芸術村デジタルアートファクトリー 長瀬一男)

「記録の活用にあたっての著作権の問題」

(文化庁長官官房著作権課庶務係長 兼定孝)

「韓国における民俗芸能の記録作成について」(韓国国立文化財研究所芸能民俗研究室学藝研究士 李在弼)



滋賀県の太鼓踊りの記録作成について事例報告する長谷川嘉和氏

今回は、記録作成というテーマであったためか、実際に事業を担当する行政関係者の出席が多く、記録作成事業の企画・実施等かなり実質的な議論が中心となりました。なお、研究協議の内容は、報告書を作成し、関係機関へ配布するとともに芸能部ホームページ上でも公開して行く予定です。

(芸能部・宮田繁幸)

日・タイ共同研究セミナー「タイ国遺跡の保存修復」をバンコク(タイ)で開催

9月4、5日に、第2回日・タイ共同研究セミナー(The Second Seminar on Thai-Japanese Cooperation in Conservation of Monuments in Thailand)が、タイ国芸術総局と東京文化財研究所の共催により、タイ国バンコクの国立公文書館小講堂で開催されました。本セミナーは、過去3年間の日・タイ共同研究「タイ国遺跡の保存と修復」(第1期)の成果を中心に、関連研究を含め、広く関係者に公開する目的で、日・タイ間の覚書に則って開催されたもので、1999年3月に第1回が行われ、今回が第2回目となります。

タイ国教育省芸術総局・アルヴス・ノエンチュクリ

ン総局長と東文研・斎藤英俊国際文化財保存修復協力センター長の開会挨拶に引き続き、2日間わたって、14件の発表と質疑応答ならびに総合討議が行われました。日本(東文研)からの発表者と演題は下記のとおりです(発表順)。尚、セミナーは全て英語で行われました。

野口英雄:「国際協力によるタイ国遺跡の保存についての知見」

斎藤英俊:「日本における歴史地区の保存」

石崎武志:「スコータイ遺跡のスリチュム寺院大仏における水分移動解析」

西浦忠輝:「スコータイ遺跡のスリチュム寺院大仏保存のための覆屋設置に関するモデル実験」

朽津信明:「レンガの塩類風化とその対策」

二神葉子:「遺跡保存へのGISの応用—東文研における研究動向—」

西浦忠輝:「石造遺跡の新しい保存方法—パキスタン・ガンダーラ地域のラニガト遺跡の保存処置」

日・タイ間の覚書により、セミナーの準備、運営はタイ国側が行い、報告書(プロシーディングス)の作成は日本側が行うことになっており、来夏までに報告書(英文)を刊行する予定です。

(国際文化財保存修復協力センター・西浦忠輝)



日・タイ共同研究セミナー(総合討議)

博物館・美術館等の保存担当学芸員研修

東京文化財研究所では保存科学部が中心になって、保存担当学芸員研修を毎年実施しています。平成13年度(第18回)は、7月9日(月)から7月19日(木)まで、2週間行いました。第1回目からこれまでの研修受講者の数は総計で364名になります。新しい研究所に移ってから2回目の研修ですので、広々とした会議室や実験室で気持ちよく研修を実施できました。研修では、主に温湿度、照明、空気環境、生物防除法などの文化財の保存環境を中心にした講義と、温湿度測定、文化財害虫の同定などの実習を行っています。今年度も、臭化メチルの代替策である低酸素濃度処理、低温処理法などや総合的害虫防除法に関する実

習などを重点的に行いました。またケーススタディーを埼玉県立博物館で行いました。ケーススタディーは、4、5人の班に分かれて、それぞれの班で研修テーマを決めて行うものです。文化財害虫をテーマとした班では害虫を真剣に観察していました。

美術館、博物館の学芸員にとっては、2005年の臭化メチル全廃が一番関心のあるテーマのようで、参加者からは代替策に関する質問が多く出ました。現場からの生の声を聞くことができ、私たちにとっても大変有意義でした。

(保存科学部・石崎武志)



ケーススタディでの文化財害虫観察

保存担当学芸員研修修了生OB会開催

昭和59年に始まった保存担当学芸員研修は今年で18回目を迎え、これまで364名の研修修了生を出してきました。この18年の間に研究も進み、保存に対する考え方も変わってきました。特に保存環境に関しては、昔は温度、湿度、光が主な問題でしたが、今は建築材料から発生する空気汚染物質が大きな問題となっています。また阪神淡路大震災を教訓に、地震に対する備えも欠かせません。研修の内容もそのような時代の流れに応じて、昔と今では大きく変わっています。そこで今年から、研修を終了した方々を対象に、フォローアップ研修を始めました。できるだけ多くの研修修了生に新しい知識を得てもらうことが大切ではないかと考え、研修修了生の同窓会（博物館保存科学研究会）と協力して、保存科学の最新の動向についてお話ししたり、現場見学を行うことにしました。今年は8月31日～9月1日に行いましたが、夏休み最後の土日にも関わらず、約50名の修了生が集まりました。会ではIPMについての講演をしたり、東文研の施設や東京国立博物館の新しい収蔵庫の見学を熱心に行いまし

た。この場を借りて開催にご協力いただいた関係の方々に
お礼申し上げたいと思います。

(保存科学部・三浦定俊)



研修OBの所内見学

保存環境地域研修開催 (於：神奈川県立歴史博物館)

博物館・美術館等の文化財公開施設における資料の保存は、保存を担当する学芸員の努力によっていることはもちろんですが、学芸員以外の館長、事務担当者や警備員、監視員、空調機器の管理・保守作業員など、博物館の様々な業務に携わる多くの人々の理解を得ることが重要です。特に2005年からの臭化メチル全廃に向け、できるだけ多くの施設関係者に文化財の保存に関する基礎的な知識を理解してもらう必要があります。

東京文化財研究所では保存担当学芸員研修を毎年実施していますが、この研修は保存を担当する学芸員を対象とし、受講者数も限られ期間も2週間と長いものなので、すべての関係者の方々に受講していただくことはできません。そのため当所では、できるだけ多くの関係者のみなさんが短い時間で文化財の保存、なかでも文化財の保存環境に関する基礎的な知識を持てるように、地方の博物館・美術館等の協力を得ながら、地域ごとに入門研修をおこなっています。

平成13年9月5日には神奈川県立歴史博物館の講堂を会場に、神奈川県博物館協会と共催で地域研修をおこないました（参加者約50名）。プログラムは以下のとおりで、参加者のみなさんに全般的な知識を得ていただくために、あえていつも同じ内容で講習しています。

1. 保存環境概論と環境調査
2. 温湿度の制御と管理
3. 照明の制御と管理
4. 空気環境の制御と管理
5. これからの生物被害防除法

今年度はこの後、12月14日に滋賀県立琵琶湖博物館（滋賀県博物館協議会と共催）で、平成14年1月17-18日に長野県立歴史館（長野県博物館協議会と共催）で行う予定です。

来年度以降の実施についてご希望の地域団体がいらっしゃいましたら、担当の保存科学部石崎・佐野までぜひお問い合わせください。

（保存科学部・佐野千絵）

夏期学術講座

芸能部では、恒例の夏期学術講座を開催しました。これは芸能部の研究員が毎年担当を決めて、関東圏を中心とする大学院生・学部学生から受講希望者をつのり、研究成果等を講義するものです。本年は7月16日から19日まで4日間にわたって、「歌舞伎の基礎資料 研究史と展望」と題して、演劇研究室から小田幸子、鎌倉恵子、児玉竜一の3名が講義を行いました。主な講義内容は、以下の通りです。

第1日 歌舞伎の番付・歌舞伎と絵画資料（児玉）、絵入狂言本と挿絵（鎌倉）

第2日 歌舞伎台帳の性格・歌舞伎台帳の周辺・歌舞伎台帳と上演（児玉）

第3日 役者評判記から劇評へ・演劇雑誌の系譜（児玉）、演出史の研究（小田・児玉）

第4日 歌舞伎と複製メディア・歌舞伎の記録（児玉）、質疑

歌舞伎研究では、二十数年来「資料整理の時代」と呼ばれ、基礎資料の整備が進められてきましたが、同時に研究分野があまりにも細分化された傾向もあります。このため、ここでは基礎資料を総合的かつ具体的に扱うとともに、各分野の研究史を詳細に紹介して、歌舞伎を専攻する受講生はもとより、隣接分野からの受講生にも益する講義を企画しました。

受講学生は計34名。ほかに大学教員や名誉研究員の姿も見られました。芸能部所蔵の資料のほか、講義者架蔵の資料などを活用した配付資料は、受講者一人につきB4用紙85枚。最終日には、受講生の関心を反映して多岐にわたる質疑が行われました。

（芸能部・児玉竜一）

2001：A Pest Odyssey

（文化財の害虫管理国際会議）参加報告

（大英図書館コンベンションセンター、ロンドン、イギリス、2001年10月1日～3日）

文化財害虫による被害は、世界でも大きな問題となっています。化学薬剤で収蔵庫全体を燻蒸する害虫駆除方法は、環境や健康被害のおそれからすでに見直しが始まり、一部では法による規制も行われています。なかでも臭化メチルの2004年末全廃を控え、世界中で新たな害虫管理の方法と代替法の開発が急ピッチで進められています。

IPM（Integrated Pest Management）：総合的害虫管理は、予防を主とする害虫管理法で、ここ10年ほどの間に世界中で取り入れられつつある方法です。この方法は、環境条件をよく検討して害虫の被害を未然に防ぎ、害虫が発生しているかどうかをモニタリングしながら、適切に対応し、管理するものです。

今回の会議は、ヨーロッパでは初めてのIPMを主題とする大きな国際会議で、ヨーロッパ諸国、北米、オーストラリア、シンガポール、日本などの各国の経験を共有し、適切な方法を発展させていくことを目的としたものです。日本からは、保存科学部・木川が「低酸素濃度および二酸化炭素による日本の文化財害虫の実践的な殺虫法」について研究発表を行い、同じように窒素ガスや二酸化炭素で害虫を駆除している各国の研究者と活発な議論を行うことができました。今回の会議で、他の国々の現状や抱えている問題点、新たな知見などを知ることができ、今後の方向性を探るうえで非常に有意義な機会となりました。

（保存科学部・木川りか）



文化財の害虫管理国際会議が行われたロンドンの大英図書館・コンベンションセンター

「国際シンポジウム：歴史的木造建造物の修理と構造補強」への参加

9月13日から16日にかけて、ドイツ連邦共和国ヘッセン州において「国際シンポジウム：歴史的木造建造物の修理と構造補強」が開催されました。このシンポジウムは科学研究費による日独共同研究（研究代表者：斎藤英俊）の成果発表も兼ねていて、日本からは下記の発表がありました。また、最後にパネルディスカッション「文化財修復技術者の養成制度と問題点」に斎藤がパネラーの1人として参加し、日本の制度の紹介を行い、ドイツと日本の制度の相違点や互いに学ぶべき点などについて議論しました。

・青木弘治（財団法人文化財建造物保存技術協会）

「日本の文化財建造物修理の手法—新潟県浄興寺本堂の修復」

・今西良男（奈良県教育委員会）

「歴史的建造物の構造解析の手法—奈良県唐招提寺金堂小屋組の構造補強のための調査」

・西澤英和（京都大学）「日本における歴史的木造建造物の構造評価」

・木村 勉（奈良文化財研究所）「修復における伝統技術の継承」

日本側専門家の発表によって示された日本の文化財建造物修復の科学的で緻密なシステムは、ドイツ国内だけでなく、ポーランドやロシア、イギリス、ノルウェーなどの専門家を含む約200名の参加者から驚きをもって理解され、賞賛を浴びました。

なお、9月11日のアメリカでの同時多発テロ事件の直後であったため、その犠牲者の冥福を祈る黙祷によってシンポジウムの幕が開かれました。また、事件の影響でアメリカなど数ヶ国からの専門家が参加できませんでした。

（国際文化財保存修復協力センター・斎藤英俊）



シンポジウム会場となったエベルパハ修道院の施設見学風景

パナマの歴史地区の保存修復協力事業に係わる専門家招聘研修

昨年度までに、パナマとの協力事業策定のための準備調査を終了しましたが、今年度は、具体的な修復事業立ち上げのための財源調達の努力と併行して、まず相手国専門家に、わが国の木造建造物修理の理念と方法を理解していただくこととしました。招聘したのは次のお二方です。

カルロス・フィッツジェラルド・バーナル

（文化庁文化遺産保護部長）

エドゥアルド・テヘイラ・デーヴィス

（建築家 パナマ大学教授）

滞在中は当センター保存計画研究室長が全期間同行し、主に現在国内で進行している修理工事現場を訪問して、可能な限り様々な修理の様相を見ていただくことを旨としました。日程は以下の通りです。

7月 9日 来日

7月10日 東京文化財研究所にて所長表敬、
打ち合わせ

7月11日 池上本門寺五重塔（東京都）

7月12日 桂離宮[見学] 大徳寺唐門（京都市）

7月13日 唐招提寺金堂（奈良市）
森村家住宅（橿原市） 今井町[見学]

7月14日 法隆寺 東大寺 春日大社[見学]

7月15日 休日

7月16日 大崎八幡宮本殿（仙台市）

7月17日 正法寺本堂（水沢市） 中尊寺[見学]

7月18日 レポート作成

7月19日 東京文化財研究所にて今後の方針協議
文化庁等関係機関表敬

7月20日 離日

幸い、工事に着手したもの（正法寺）を始めとして、解体修理とそれに伴う調査の、さまざまな段階を伝え、正確な知識と理解を与えることができました。各現場において懇切丁寧に説明して下さった主任技術者の方々に、紙面を借りてお礼申し上げます。

（国際文化財保存修復協力センター・松本修自）

青銅器の製作技法・材料の変遷―中国から共同研究者を迎えて

8月13日から31日までの3週間、香港中文大学の楊秀麗氏を科学研究費、基盤研究A：「早期中国青銅器の原料産地に関する研究」の一環として招待し、相互の研究に関して討論しました。また氏が持参した中文大学博物館所蔵の古代中国の特に南海岸領域における青銅資料に関して化学組成・鉛同位体比を測定しました。氏は機器測定の研修を行い、氏自身で測定できるまでの技術を習得しました。

測定されたこれら資料は今まで当研究室で進めてきた「東アジアにおける青銅材料の流通と変遷」に関して、有意義な結果でありました。

今後、南海岸地域における青銅文化の発展を意義付ける資料、および東南アジア各国の古代資料との比較において重要な資料を測定することを次の目標として立てることができました。

(保存科学部・平尾良光)

中国からの外国人特別研究員 (孫喜山氏) の招聘

保存科学部では、日本学術振興会外国人特別研究員として来日されたハルピン建築大学建築熱エネルギー工学部講師の孫喜山氏を、9月25日から2年間の予定で受け入れています。孫さんの専門は、建築材料の熱、水分特性や建物内部の熱、空気環境の解析です。こちらに来る前は、筑波の建築研究所で2年間「建築材料中の熱水分同時移動係数の研究」をテーマに研究を行って来ました。建築材料には、石材、レンガ等も含めて、多孔質体と呼ばれる、小さな孔の空いた構造をしているものが多くあります。石材の凍結劣化もレンガなどの塩類風化も、多孔質体内の水分が移動して、結晶として析出することによるものです。石造文化財の劣化のメカニズムや保存対策手法を構築する上で、多孔質の水分特性、移動特性を正しく把握することは重要な研究テーマです。また、収蔵庫や展示室などの壁面材として使われている調湿材も多孔質材で、その吸放湿特性は、室内の湿度変化に大きな関係があります。そこで孫さんとは、保存科学部で行っている文化財の保存環境の研究、石造文化財の劣化機構に関する研究に関して共同研究を進めていく計画です。孫さんは日本語が流暢で、話題も豊富なので気軽に声をかけ下さい。

(保存科学部 石崎武志)



孫喜山さん

龍門石窟研究所馬朝龍研究員研修終了

東京文化財研究所では、世界の貴重な文化遺産である中国の龍門石窟の保存について、中国・龍門石窟研究所と協力して調査、研究を開始しました。本協力事業の中で、特に龍門石窟研究所の人材育成は極めて重要な課題であるため、若手の研究者を日本に招聘し、石窟の保存修復に関する種々のテーマについて研修を行うことになりました。

龍門石窟研究所馬朝龍研究員は第一人目の研修生で、財団法人文化財保護振興財団の助成により、2000年11月から2001年9月までの10ヶ月間、国際文化財保存修復協力センターにて研修を受けました。研修では龍門石窟で問題となっている環境整備を念頭に置き、近々龍門石窟で採用予定の野外の環境変化を測定できるDATAMARK観測機器の使用方法和データ処理技術の習得に努めました。また、科学的な分析手法を研修するため、龍門石窟の彫像表面の彩色や風化生成物の科学的な分析を行いました。



X線回折分析のための試料調整をしている龍門石窟研究所馬朝龍研究員(中央)

この研修の間、馬研究員は熱心に日本語を習得し、所内職員や他の研究者との交流を深めました。2001年8月29日には日本語で研修の成果を報告しました。最後に馬研究員から「研究所の方々のおかげで、研究の能力を高めることができました。研究所で学んだことを基に研究を続けていきます。今後、東京文化財研究所と龍門石窟研究所がより関係を深め、文化財についての研究を進めていくことを切に願っています」とのコメントを頂きました。

(国際文化財保存修復協力センター・岡田 健)

北朝鮮高句麗古墳保護担当者来訪

朝鮮民主主義人民共和国高句麗古墳保護担当者5名が高句麗古墳群の保護並びにユネスコ世界遺産への登録に関連して来日し、7月4日に東京文化財研究所渡邊所長を訪れ所内施設の視察及び壁画の保存・修復等に関する意見交換を行いました。

(管理部・山岸智幸)

敦煌研究院院長来訪

敦煌研究院樊錦詩院長及び劉永増氏が日本で開かれていた敦煌莫高窟の展覧会にあわせて来日し、8月28日に東京文化財研究所渡邊所長を訪れ所内施設を視察し、今年度で敦煌莫高窟壁画の保存・修復に関する第三期共同研究が終了するため、今後の敦煌莫高窟壁画保存修復の共同研究に関する討議を行いました。

(管理部・山岸智幸)

チュニジア国立文化遺産研究所長の来訪

チュニジア国立文化遺産研究所長 Ben Fraj Boubaker 氏が日本の文化遺産の保存状況の視察と文化遺産に対する政策、保存方法について意見交換を行うために来日し、9月6日に東京文化財研究所を訪れ所内施設の視察と文化財の保護に関する意見交換を行いました。これらを通じ Boubaker 所長より東京文化財研究所と文化財保護に関するパートナーシップを結びチュニジアと日本の文化遺産保存の交流に尽力したい旨申し出がありました。

(管理部・山岸智幸)

黒田記念館 公開日カレンダー 2002 年 1 月～3 月

公開日は毎週木曜日と特別観覧日の 13:00－16:00 です。

2002																													
1										2										3									
1	2	3	4	5						1	2									1	2								
6	7	8	9	10	11	12				3	4	5	6	7	8	9			3	4	5	6	7	8	9				
13	14	15	16	17	18	19				10	11	12	13	14	15	16			10	11	12	13	14	15	16				
20	21	22	23	24	25	26				17	18	19	20	21	22	23			17	18	19	20	21	22	23				
27	28	29	30	31						24	25	26	27	28					24	25	26	27	28	29	30				



ギャラリーとなった旧陳列室から黒田記念室を見る（撮影：写真室 城野誠治）

編集後記

東文研NEWS最新号をお届けいたします。平成13年度第2四半期（7月～9月）のニュースをお伝えする第7号では、第一面に黒田記念館リニューアルオープンの記事を大きく掲載しています。黒田記念館は、文化財研究機関としての東文研と社会をつなぐ重要な顔のひとつです。新

しい年を迎え、はやくも独立行政法人となって第一年目の研究成果を、凛とした緊張感のもとでまとめる時期が近づいていますが、多彩な研究プロジェクトは、この間に国内外を舞台に順調にすべりだしたことになります。次号でも、その続報をお伝えいたします。